

治平 & 柏原在线(OFFLINE)!

研究推進部長 丹生 憲一

10月6日(火)に2年生の丹 BAL 台湾では、桃園にある治平高級中学校とオンラインで交流しました。

本校視聴覚室と治平の講義室を zoom でつなぎ、代表がそれぞれの学校生活や文化について紹介する様子を、本校では教室にいる生徒たちが zoom を通じて視聴しました。オブザーバーとして後藤みなみさんも参加されています。

11時45分ちょうどにはじまった交流では、12時10分まで柏原高校が、12時40分まで治平高校が話しました。2年2組の池本真夏君と足立龍希君が、「みなさんは、日本の食べ物を何か食べたことがありますか?」と切り出し、寿司、てんぷら、ラーメンの写真を見せながら、調味料についても解説し、「おいしいものがたくさんあるので来て食べてください」と食をアピール。前日のリハで後藤みなみさんから、「台湾でも日本食は食べられるから、『食べたことある?』とか聞いてみたりするといいね」とアドバイスをいただいていたので、上手に和やかなムードをつくってくれました。3組の煙上裕貴君と徳田祥弥君は「二人とも音楽に関係する活動をしているので」と優里さんの「かくれんぼ」を演奏。スクリーン越しに手拍子をしてもらいながら、ピアノと歌を披露しました。4組の福田有都さんと澤山滯霞さんは体育大会と文化発表会について説明。競技や応援、演劇や演奏シーンの写真を見せながら、「コロナの影響でできないことはあったけど、楽しんだ」ということを伝えました。昨年の演劇「シンデレラ」の写真では治平側から歓声も! 5組の蘆田圭人君と細見寿瑛瑠君は、二人が所属するワンダーフォーゲル部の活動を、山に登った時の写真を見せながら熱く語りました。最後は「台湾にも富士山よりも高い山があると聞きます。ぜひ、私たちと山に登りましょう!」と…学校紹介というよりも、勧誘活動のようでした。最後に6組の足立準君と酒井健汰君は日本の漫画・アニメについて。「ONE PIECE」や「鬼滅の刃」などを例に挙げ、最後はビブリオバトルさながらに、持参した漫画本「僕のヒーローアカデミア」について熱弁をふるいました。台湾でも日本の漫画やアニメは人気があるようで、タイトル名をあげるたびに拍手と歓声が聞こえました。

治平高校からは12人(うち3組は2人組)が、観光地、食べ物、学校生活について紹介してくれました。電波が途絶える場面もあり、すべてが聞き取れたわけではありませんでした。熱心に部活動に取り組んでいるようすは、日本も台湾も同じだなあと感じましたし、スイーツを紹介した人が豆花の写真を見せてくれた時は、視聴覚室でも「おいしそう!」という声があがりました。治平の生徒たちは母語で話すわけではないので、原稿を読んでいる場面が多かったのですが、色々な表現を知っていて、さすが「応用日語」の専攻だなあと感心させられます。ただ、やはり話すだけでは伝わりにくいことも確かです。「復興郷(プーシンシャン)」について説明してくれた人の日本語は上手で、説明そのものはよくわかったのですが、肝心の「プーシンシャン」が何なのかわからなかったため、メールで先生に確認しました。文字や写真の助けは必要ですね。…ということが分かったのも、今回の交流では大きな収穫でした。その後、治平の先生から「この交流をぜひ続けたい」とラブコールを受けました。授業の中で毎回繋ぐことは困難なので、さみどりホールにある Webex ボードを活用して、昼休みなどに皆さんが自由に海外の学校と交流できるような仕組みを考えています。「柏高校内留学」が実現する日も近い!



「もやもや」を大事にする

研究推進部 吉田 究

6日(火)、2年1組の探究Ⅱでは、ポスターの素案(ラフ)を元に中間発表会を行いました(先週報告した1年生「丹 BAL」の中間報告会と似たような会です。。「ポスター素案」と言っても、班によっては本当にほぼ「粹」しかないようなもので、「中間発表会」とは言っても、まだまだ今後の活動の予定を語る現況報告会のようなものだったのですが、8つのグループが順番におよそ3～5分ずつ報告を行い、授業担当者が7～5分程度アドバイスをを行いました。互いに早口で、駆け足のような2時間でしたが、それでも、それなりに意義深い時間であったように思っています。その会で感じたこと、2点。

まず、これまでずっと書いてきたように、「文脈」を作るのが難しいということです。メンバーで分担する個々の項目の必然性とか、フィールドワークやアンケートの位置付けとか、活動から見えてくる今後の課題とか、全体の大きな流れにもっとシンプルな力強さがほしいということです。

2点目は、問いを明確にするということ。何が解き明かすべき疑問、解決すべき課題、切実に知りたいこと、研究のテーマなのかということです。これが一番に難しい。前に書いたかもしれませんが、この春まで大学院に通っていた私は、2週間に一度ゼミ発表をしておきながら、修士論文のテーマ(問い)が本当に見えたのは2年目の6月、一度は論文の目次も書き、学会発表を目前に控えた時期のことでした。「問い」を立てるとするのはそれほどに難しい、…という記憶が私にはあります。

* * * * * * * * *

一昨日(7日)の晩、篠山で、文科省の放射線副読本を読み解く勉強会(講師:守田敏也さん)に参加してきました。『副読本』を読んで感じる「もやもや」についてみんなで話し合おうという学習会。中で、ニューメキシコ(米)にあるニュークリア・ミュージアムの話があり、被害や危険性をおし隠し、ただただ核の有用性、可能性だけを語る展示内容が『副読本』の性格に似ているのではないかと「もやもや」。政治的だとか右だ左だとか言う以前に、私たちは自分の肌感覚としてこの「もやもや」を忘れてはならないのではないかと思うのです。(別件ですが、私は以前「教師の仕事は『本当にこれで良かったのか?』といつもクヨクヨし続けることだ」という話をし、何人かの同業者に激しく同意してもらったことがあります。)

* * * * * * * * *

探究Ⅱの中間発表会である班に対して言ったのですが、「コロナ禍で地方への移住が増えたというのは、裏を返せば、東京一極集中への問題意識の表れなのではないか」と。「みんなそうだから」とか言って、声が大きくて、勢いのあるものに流され、自身の感覚を見失うようでは、新学習指導要領の言う「主体性」の育成など望みません。

「移住者の中にはそういった高い問題意識を持つ人が多いように思う」とも上述の班に話したのですが、篠山での放射線勉強会を始め各地で行われる様々なイベントで、たくさんの「移住者」である知人に会います。主体性の表れかと思い、毎回学ばされ、刺激を受ける私です。

